

[実践報告]

パーキンソン病患者のダンス活動に関する エピソード記述による分析

古賀 弥生(九州産業大学地域共創学部教授、アートサポートふくおか代表)

抄録

日本におけるパーキンソン病患者を対象としたダンス活動は、近年大きな進展を見せており、身体機能の維持・回復を目的としたリハビリとしてのダンス、欧米のバレエ団等によるメソッドを取り入れた芸術活動としての展開など、さまざまな取り組みが見られるようになりつつある。本稿は、福岡県福岡市のパーキンソン病患者専門の高齢者施設で日常的な活動として取り入れられているダンスの実践活動を報告するものである。この活動はリハビリテーションの一環として位置づけられているが、創造的な表現活動への展開の道も開かれている点に特色がある。その人が生きる地域や社会、それぞれの環境の中でその人らしく生きていくことをサポートするリハビリがダンス活動を通じて実現されている事例として、エピソード記述の手法を用いながら報告する。

Key word

パーキンソン病、PDダンス、リハビリ、コミュニティダンス

1. パーキンソン病患者を対象としたダンス活動について

1-1. 活動事例とその展開

パーキンソン病を持つ人々のためのダンス活動については欧米各国で事例が見られる。

アメリカ・ニューヨークに拠点を置くマーク・モリス・ダンスグループ(以下、MMDG)の'Dance for PD'は2001年に開始され、パーキンソン病の患者、家族、友人、ケア関係者等を対象としたダンスクラスを開設している。MMDGが運営する'Dance for PD'のホームページによれば、MMDGのダンス活動はバランス感覚や認知能力など身体機能のみならず精神機能にも創造的に働きかけるとされ、その手法による指導者養成はアメリカ国内32の州と17か国で実施されている¹⁾。

イギリスではコミュニティダンス財団のサイトPeople Dancing に'Dance for Parkinson's Partnership in UK'が開設されており、英国内で実施されている112のクラスが紹介されている²⁾。

またイタリアでは美術館等の芸術的空間で行われるパーキンソン病患者を対象としたダンス活動'Dance Well'が、2013年からダンスセラピーではない芸術活動としてのダンスを提供している³⁾。

このような欧米での取り組みが日本でも導入されている。

石川県では、イタリアの'Dance Well'指導者として認定を受けた金沢市のダンスアーティストを中心に、2019年から'Dance Well 石川'の活動が始まっている⁴⁾。さらに同年、彩の国さいたま芸術劇場(指定管理者:公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団)でMMDGによる'Dance for PD'の指導者向けワークショップが開催され、同劇場はその後も公益財団法人スターダンサーズ・バレエ団との協働により継続的に「パーキンソン病患者のためのダンス・プログラム患者さん向けダンス・ワークショップ」を行っている⁵⁾。

本稿で報告する福岡での取り組みは、2016年に前身となる活動が開始されており、日本国内での活動としてはこれらの動きに先立つものであるが、日本国内でパーキンソン病患者に対するダンス活動を導入した早期の例では、大阪・広島で開始された運動機能に加え認知機能、精神機能へも同時に働きかけるリハビリ活動としての取り組み⁶⁾が知られている。

早期の取り組みがリハビリテーション(以下、リハビリ)を目的としたものであるのに対し、'Dance Well 石川'やさいたま芸術劇場の例は芸術的な身体表現活動としての実施と見られる。リハビリの一環・運動療法としてのダンスから芸術活動としての実施へと流れが見えつつあるなか、福岡の事例は、後述のように日常的なリハビリのひとつとして行われながらステージでの表現を含む芸術活動へもつながるところに独自性がある。

1-2. 医学的見地からのダンス活動の効果検証

上述の欧米における活動では、それぞれの関係者が活動の効果についても一定の発信をしている。例えば、MMDGでは公式サイトで神経学などの学会誌に掲載された論文を紹介してダンス活動の効果アピールしており、'Dance for Parkinson's'及び英国ナショナルバレエのホームページにはローハンプトン大学のサラ・ヒューストンによる同バレエ団の活動の分析結果に関するコメントを掲載している。

日本では、リハビリとしてのダンス活動について効果測定[高畑・宮口2012]や効果の持続性を検証した発表[小西ほか2015]などが見られ、医学や理学療法の分野から一定の事例検証がなされているものの、活動そのものが発展途上であり成果検証も今後期待されるところである。

2. 福岡におけるパーキンソン病患者のためのダンス活動

本稿では、福岡県福岡市のパーキンソン病患者専門の高齢者施設で日常的に取り入れられているダンス活動について取り上げる。この活動は、施設内でリハビリの一環として位置づけられているが、当該施設職員によれば、入居者の生活を豊かにするための方法としてリハビリを捉えているという。ここでの活動への参加を通じて身体表現への意欲を持った参加者は施設外で実施される創造的な表現活動や舞台公演に参加する道も開かれている点に特色がある。上述のようにパーキンソン病患者を対象としたダンス活動にはリハビリから芸術活動としてのダンスへという近年の流れが見られるが、参加者にとって「リハビリか芸術か」の厳密な線引きはあまり意味を成すとは思われず、むしろ両方の意味合いから関心を寄せて参加する場合もありえる。本事例には両義性があり、身体的・精神的

機能に働きかけることにダンスの力を活用するのみならず、表現や創造の喜び、コミュニケーションをもとにした社会とのつながりをも生み出し、その力を舞台公演という形で広く知らせる活動へと展開されている。

以下、実践事例の詳細について述べる。

2-1. 活動の経緯：PDダンス⁷⁾からPDハウスでの取り組みへ

当該活動の前史として、複数回にわたってMMDGの指導者養成セミナーを受講し認定指導者となった福岡のダンスアーティスト・マニシア氏が、福岡大学医学部神経内科学の坪井義夫医師と日本パーキンソン病友の会福岡県支部関係者らの協力を得て開始した「PDダンス」の活動がある⁸⁾。2016年6月に開始されたこの活動は、福岡市内公共施設で月に1回90分程度のレッスンとして継続され、2020年8月までに5回のステージ発表も行われている⁹⁾。

これらの活動の展開にあたっては、折にふれて坪井医師の協力があつた。その坪井医師を通じて2018年末、金沢市に拠点を有する介護サービス事業者の株式会社サンウエルズが福岡市にパーキンソン病患者専門の高齢者施設を開設するという情報がもたらされた。坪井医師の仲介によりサンウエルズ関係者とマニシア氏、そしてマニシア氏の活動を支える一般社団法人パラカダンスの野中香織氏が引き合わされ、後日、サンウエルズ関係者がダンス活動の様子を視察することとなった。その結果、患者によるダンスが「アート」になっておりダンス活動が参加者の生きがいにもなっていることにサンウエルズ関係者が共鳴し、新たに開設される施設における日常的な活動としてダンスを導入することを決めた。さらに同施設でのダンス活動には坪井医師による医学的な観点からの成果検証の実施が検討されることになった。このような流れと並行してパラカダンスが文化庁の事業委託¹⁰⁾によって資金を得るなど、活動を支える枠組みが整えられていった。

施設は2019年6月、福岡市早良区野芥(のけ)に開設された(「PDハウス野芥」)。同年7月13日、パラカダンス主催の「PDダンスカフェ」(坪井医師によるパーキンソン病に関するレクチャーと相談コーナー、ダンス体験が行われた)が野芥の施設で開催され、これを契機として毎週月曜日の14時から1時間、施設内でのリハビリ活動としてダンスが導入されるようになった。

施設側は理学療法士、作業療法士等複数の担当者を置き、マニシア氏や野中氏との綿密な話し合いのもと、ダンス活動を支える環境を整えている。坪井医師は同施設の運営顧問を務めると同時に、継続的な成果検証も行う。

2-2. 「PDハウス野芥」での半年間の活動から見えるもの：エピソード記述による分析

「PDハウス野芥」(以下、施設)では2019年7月から毎週1回1時間ずつのダンス活動が継続的に実施されている¹¹⁾。入居者は原則として通常のリハビリ活動かダンスか、自らの意志で選択して参加している。

ここでは、2019年12月までの約6か月間、活動が継続された時点で参加者の様子から見えるものをエピソード記述の手法を用いて報告したい。

エピソード記述とは、人の活動の意味を数値ではなく言葉で表現する質的評価の手法のひとつで、現場で起こった人の言動をその背景も踏まえて読み解くものである。もっともオーソドックスなやり方は、①背景の提示、②エピソード本体の提示、③メタ観察(そのエピソード場面が直接に示す意味

を超えたもの)の提示、という流れで分析を進める方法で、観察者が現場で感じたことも②のエピソードに書き込まれる [鯨岡2005, 2012]。

本稿では、エピソード記述の手法を踏襲したうえで、各エピソードに④考察の提示を加え、さらにいくつかのエピソードを総合した考察を行うことでPDダンスの成果を検証する。

筆者は、2019年7月からほぼ毎週実施されたダンスの活動のうち、8月と12月にそれぞれ複数回の現場観察と記録を行った。また、8月の1回分、12月の1回分はビデオ撮影も行い、文字による詳細な記録も作成した。これらの記録からエピソードを抽出し、4か月間の変化を適宜参照した。さらにダンス活動のファシリテーターであるマニシア氏(以下のエピソード記述では「マニシアさん」)、野中氏(同「そらちゃん」)、そして理学療法士等施設スタッフからの聞き取りも行い、背景や考察に取り入れている。

なお、施設入居者は7月の活動開始当初19名、うちダンス活動参加者は16名であり、その後徐々に増えて12月には27名中21名の参加となった。



図1 「PDハウス野芥」でのダンス活動の様子

エピソード1 想像力

《背景》

マニシアさんのダンスはコンテンポラリーダンスといわれるジャンルで、決まった振付で踊るだけでなく、即興的にその人の身体から出てきた動きを大切にする。PDダンスでも、特に導入のストレッチでは動きの見本を見せ、参加者がその真似をすることで進行していくが、だんだんその人なりの自由な動きを引き出すような内容になっていく。

マニシアさんはストレッチであっても、単純に手を挙げる、息を吸う、ではなく、頭の中に何らかのイメージを想起させるような声掛けを行う。例えば、呼吸は「足の裏から吸いあげるように」「頭がマシュマロのように柔らかくなったら…」、腕を上げるときは「指先から芽生えて葉が出て花が咲く」というように。

《エピソード記述》

8月。参加者のほとんどはマニシアさんの言葉に反応するよりも、身体の動きを見てそれを真似ようとしている。多くの参加者は真面目に真似ている。しかし当然のことながら、プロのダンスアーティスト

であるマニシアさんやそらちゃんの大きく美しい動きのようにはいかず、参加者の動きは小さく硬い。

12月。活動の冒頭、深い呼吸をしながら身体を動かすプログラムで、マニシアさんの「足の裏から息を吸います。指、手首、ひじ、肩、首。風に揺られるように」といった言葉に反応し、「吸い上げる」「揺れる」動きをする人たちが少なくとも5,6名は見受けられる。

《メタ観察》

8月の時点では「お手本」を真似る動きを確実にに行おうとする様子が見られたが、12月にはイメージを喚起させるようなマニシアさんの言葉に反応し、想像して自らの発想で動く参加者が出てきている。

また、次のダンスの説明中や、順番に動きを回すプログラムの自分の番ではないときなど、自分が動くことを求められていないときにも「踊る」様子が12月には多く見られるようになった。

全体のプログラムのなかで、曲に合わせて踊る活動が8月時点で4曲、12月時点では6曲へと増え、より動きが激しいダンスへと進展しており、参加者の身体の動きは活発になっているように見える。

《考察》

参加者は、パーキンソン病であるか、あるいは正式な診断を受けてはいないが、類似する症状を有する高齢者であり、認知症である方も含まれる。8月から12月の約4か月の間にも病気は進行し、身体機能や認知機能が衰えていくのはやむを得ないことである。

しかし、ダンス中の様子からは、想像力を働かせ、身体も活動的になっている様子が見て取れる。「リハビリ」の結果として肩の可動域が何度拡大したか、といった運動機能の観点からの成果検証ではどのような数値が出るのかわからない。しかし、ダンス活動を楽しむ心の動きから身体や脳の活動が軽やかに行われている、という印象を受ける。

エピソード2 Aさんの「ピアノ」

《背景》

男性参加者Aさんは難聴であり、日常的なコミュニケーションでは施設スタッフが耳に口を寄せて話をし、彼の小さな声を聴き取る、というやりとりで成立している。足を動かすことは難しく、移動には車いすを使用している。何らかの刺激がないと眠っているかのような状態になることが多い。ダンス活動でも、マニシアさんの言葉を聴き取ることは困難なようで、周りの人たちの動きを見て、それが繰り返されるうちに遅れて自分も動く、という様子がよく見られる。

《エピソード記述》

12月の活動。ジャズのスタンダード曲に合わせ、マニシアさんとそらちゃんが参加者一人ずつの前に立って踊り、隣の席の人の前へと移っていく。短時間ながらマンツーマンの関わりを持ち、決まった振り付けなしで踊るフリータイムだった。二人は、ときに参加者の手を取るなどしながら身体の表現を引き出していく。参加者はそれぞれの身体の状態に応じて、音楽に乗り身体を動かしている。笑顔の参加者が多い。なかには立ち上がって踊り出す人もいる。

Aさんは座ったまま、両手を差し出したマニシアさんの手のひらのうえで両手の指を小さく動かすしぐさを見せた。マニシアさんはこのとき、彼の動きを受け止め「ピアノを弾いているみたい!」と言いながら、ずっと手のひらでささやかな指のタッチを受け続けていた。Aさんは笑顔であった。

《メタ観察》

ダンス活動に立ち会っている作業療法士、理学療法士の方々は、参加者の様子をよく観察し、動きが鈍いと感じると横について声をかけたり、参加者の手をとって動かしたりといった働きかけをする。その場合、本人の能動的な動きではないが、可能な限り大きく身体を動かそうとするようである。また、参加者の名前を呼ぶ、歌うなど声を出す場面では、スタッフが率先して大きな声を出し、場を盛り上げると同時に、参加者にも大きな声を出すよう促す。参加者自身もフリータイムでマニシアさんや、そらちゃんが自分の前に来ると、思い切った動きを見せる時が来た、と認識してか、大胆な動作をする傾向がある。

Aさんの、この場面での動きはとてもささやかであった。仮に彼の前に立ち一緒に踊ったのが施設スタッフだったとしたら、おそらくは両手を握り揺らしたり高く上げたりと大きく動かしたであろうと推測できる。しかし、マニシアさんはそうしなかった。指を動かすだけでも「ダンス」あるいは彼なりの「表現」と受け止めているように見えた。

《考察》

施設では、参加者の能力や病気の特徴を理解したスタッフによってダンス活動が支えられている。病気の特性として身体の動きが小さくなりやすいことから、施設スタッフが介入する際は参加者の身体をできるだけ大きく動かそうとする。また、参加者もダンサーの大きな動きを真似ることを求められている、と感じるのか、同じように動こうとすることが多い。

そのなかで、マニシアさんは指のささやかな動きだけで「踊る」Aさんを受け入れ「ピアノを弾いてみたい!」と肯定的に受け止めた。その人なりの「表現」を引き出すダンスの本質が垣間見える。

エピソード3 深いコミュニケーション

《背景》

施設は2019年6月に開設されており、この時点ではダンス活動の参加者は入居して間がなく、お互いのことをまだよく知らない状況であった。入居者の居室は個室、食事のときは2階の食堂に集まるが、日々の生活やリハビリ活動のメニューは個別に組まれているので、全員が顔を合わせて交流する場はあまりないのが日常の様子である。

《エピソード記述》

①8月の活動。ダンスの動きがともしれば盆踊り調になる男性参加者Bさん。踊るよりも手拍子で盛り上げようとする場面もある。(実際にはない)ワイングラスを持ったつもりで隣の人へと「乾杯」の動作を回していくシーンでは、ワイングラスがいつの間にかおちよこになったようで、見事に杯を干すしぐさを見せ笑いを誘う。ダンス活動終了後、女性参加者Cさんから「Bさんがこんなに明るい人って初めて知りました」という発言がある。

②同じく8月。フォークダンスのような音楽に合わせ、隣の人の手を取ってステップを踏むプログラムで、手をつなごうとしない男性参加者Aさん。隣席の女性参加者Dさんがやや強引に手を取って握る。活動終了後のおしゃべりで、女性参加者Cさんがその場面に触れ「どっちも恥ずかしがりだから」「まだよく知り合っていないですよ」と話す。

③12月の活動の終盤。ダンス活動の締めくくりで「見上げてごらん、夜の星を」を歌うことが恒例になっていた。歌いながら感極まってしまう女性参加者Eさん。両隣の女性Fさん、GさんがEさんの手を握り肩に手を置く様子が見られた。

《メタ観察》

施設が開設されて間もない8月は、入居者が順次増加していた時期でもあり、同じ施設で暮らすメンバーがどのような人たちなのかを入居者同士では把握できていない状況だった。その中でダンス活動は入居者の多くが顔を合わせる数少ない場であった。

12月になっても、それぞれの生活が各自のペースで営まれていることから、一堂に集まって交流する場として、週に一度のダンス活動が大きな役割を果たしている。

「見上げてごらん、夜の星を」で感極まるEさんには、何かこの曲に思い出があるのだろうか。その詳細はわからないが、彼女の気持ちを察し手を差し伸べるFさん、Gさんには共感や互いに支え合おうとする姿勢が見えた。施設スタッフによれば、EさんとFさん、Gさんは普段特に親しいわけではないという。

《考察》

ダンス活動は全員で輪になってお互いの顔が見えるところで行われており、ダンスを通じてそれぞれの個性が垣間見えることから、施設内での生活の他の時間にはないコミュニケーションの場になっている。

また、ダンス活動の中では、参加者は座ったまま隣の人と手をつなぐ・接触する場面が毎回盛り込まれている。このことで、手を握る程度の身体接触への遠慮や抵抗が低減し、なんらかの気持ちや思いを伝える方法として自然な接触ができる関係になっている。

高齢者施設で通常行われるレクリエーション活動や、食堂に集合する食事の時間等でも入居者相互の交流は図れると思われるが、ダンス活動では互いの個性や感性が端的に表現される場となるため、単におしゃべりをする、一緒にゲームをするといった交流よりもっと深い関係性の構築につながっているものと思われる。

《総合考察》

ここで、「リハビリ」つまりリハビリテーションとは何かをあらためて考えてみたい。

WHO(世界保健機関)による定義では「リハビリテーションとは、老化や健康状態(慢性疾患、障害、外傷など)により、日常生活の機能に限界が生じているか、その可能性が高い場合に必要となる一連の介入」「機能の限界の例は、考える、見る、聞く、コミュニケーションをとる、移動する、人間関係を持つ、仕事を続けるなどが困難になるということ」とされている¹²⁾。この定義からは、一般的な「リハビリ」という言葉から想起される機能回復訓練のみならず、コミュニケーションや人間関係など社会生活にも関わる広い意味が含まれることが理解できる。

砂原茂一は「もともとリハビリテーションという言葉は、中世においては領主や教会から破門されたものが許されて復権することを意味した。(中略)このように、人間であることの権利、尊厳が何かの理由で否定され、人間社会からはじき出されたものが復権するのがリハビリテーションである」[砂原 1990]と述べている。

つまりリハビリテーションという言葉は、失われた機能の回復や、それ以上機能が低下しないように行う運動療法だけでなく、リハビリを行う人が地域や社会、その人が生きる環境の中でその人らしく

生きていくことを目指すものと理解できる。

ダンス活動が行われる当該施設においても、リハビリとは運動のみならず入居者の生活を豊かにするための方法と位置付けられており、日々の買い物やカラオケ、卓球や人とのコミュニケーションでさえもリハビリの一環と捉えられている(サンウエルズ関係者談)。このような位置づけのもとでダンス活動も実施されており、ダンスが他者との交流に喜びを感じ、生き生きと暮らす、人として当たり前前の姿を取り戻す場、つまりリハビリテーションの本来の意味を実現する場になっているといえるのではないかと。

このことは、入居者Cさんの様子を見て、娘のHさんが語った言葉を想起させる。「(母が発する言葉は)いつもイタイとか、きつい、しか聞かないです。(ダンスの活動では)笑ってるのがすごい。昔と比べてしまって、あ、これできてたのになーと(思ってしまう)…。ここは昔の、できる母が見える」とHさんは語った。

ダンスは参加者を「病気のためにできないことがある人」ではない、当たり前前の存在に戻している。

3. むすびにかえて:リハビリと芸術活動との「架橋」

上述の「エピソード」から読み取れるように、施設でのダンス活動はリハビリであり、かつ身体表現活動に近いものである。

施設でのダンス活動参加者のうち、特に熱心な入居者は上述の市内公共施設で実施されている月1回のPDダンスにも参加するようになった。そして、PDダンス参加者による舞台出演¹³⁾にも施設から5名が合流しステージでのパフォーマンスも経験している。ステージ上で披露されたのは、リハビリ活動ではなく身体表現活動としてのダンスであった。このようなリハビリから芸術表現への流れが見える一方、表現活動に重きを置くPDダンスの参加者にも「リハビリのつもりで参加している」と語る人がいる。施設ではリハビリ、PDダンスは表現活動という一応の色分けはあるものの、活動を主導するマニシア氏らにとっても参加者にとっても、これらの活動は地続きであり、境界線を引くことはできないし意味を成さない。この活動は「アーティストが関わり、“ダンスの持っている力”を地域の中で活かしていく活動」であるコミュニティダンスとして展開されているといえよう¹⁴⁾。

病を得ても、体調や意欲によってはできることがたくさんあり、その人らしい生き方ができる。ダンスがそれを引き出し、支えているのである。

本事例の施設におけるダンス活動は今後も継続され、坪井医師らによる医学的見地からの検証も行われていく。新型コロナウイルスの影響下にあった2020年度は、オンラインでマニシア氏らと施設をつないだ活動が続けられた。長期にわたる日常的な活動としてのダンスの導入がもたらすものについて、引き続き注目していきたい。

謝辞

本稿はダンスアーティストのマニシア様、一般社団法人パラカダンス・野中香織様、福岡大学医学部・坪井義夫様、株式会社サンウエルズ様、PDハウス野芥のスタッフの皆様、そしてダンスに参加されているPDハウス野芥入居者の皆様のご協力を得て執筆しました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) Mark Morris Dance Group “Dance for PD”2020年8月5日確認
<http://markmorrisdancegroup.org/community/Dance-for-PD>
<https://danceforparkinsons.org/>
- 2) The Foundation for Dance “People Dancing”2020年8月5日確認
<https://www.communitydance.org.uk/creative-programmes/dance-for-parkinsons>
- 3) Dance Well2020年8月5日確認
<http://www.operaestate.it/dance-well-2/>
- 4) Dance Well 石川2020年8月5日確認
<https://www.dancewellishikawa.com/>
- 5) 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団(彩の国さいたま芸術劇場)ホームページ2020年8月5日確認
<https://www.saf.or.jp/arthall/>
公益財団法人スターダンサーズ・バレエ団ホームページ2020年8月5日確認
https://www.sdballet.com/?_fsi=yZBGSOkn
- 6) 高畑・宮口編2012, 橋本編, 高畑・宮口・中西著2019参照。いずれもダンス制作は橋本弘子。
- 7) 「PDダンス」というネーミングは、月1回のダンス活動参加メンバーの発案によりParkinson's Dance と Perfect Dance のふたつを重ね合わせた造語として使われるようになったものである。
- 8) 福岡でのPDダンスについては古賀2019参照。
- 9) 2019年6月4日～7日、国立京都国際会館(京都市)で開催された5th World Parkinson Congress オープニングでのステージパフォーマンスを含む。
- 10) 障害者による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)を令和元年度、2年度にわたり受託。
- 11) 2020年に入り、ダンス活動は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて2月から5月まで中断された。同年6月、サンウエルズによるパーキンソン病患者専門の高齢者施設が福岡市内にもう1か所開設された(「PDハウス有田」)のを機に、2施設と在宅のマニシア氏、野中氏をオンライン(Zoom)でつないで実施されるようになっている。
- 12) 日本WHO協会がWHOのメディアセンターより発信されているファクトシートのキーファクト部分について、2014年3月にWHO本部より付与された翻訳権に基づき作成した日本語訳である。
- 13) 2020年2月2日(日)福岡県立ももち文化センターで行われた「PEOPLE ART PERFORMANCE 2020」。一般社団法人パラカダンスとももち文化センターの共同主催。

- 14)日本においてダンスの持つ力を社会に広げる活動に尽力するNPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークは、「ダンスの経験の有無、年齢・性別・障がいに関わらず誰もがダンスを創り、踊ることができるという考えのもと、アーティストが関わり、“ダンスの持っている力”を地域の中で活かしていく活動」をコミュニティダンスと定義しており、ダンスの力を「自分の身体を使って“表現する力”」「ゼロから何かを“創造する力”」「他者と“コミュニケーションする力”」としている。JCDN2010(1)(2)参照。

参考文献

- NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN), 2008,「イギリス・コミュニティダンスの現状視察(2007年6月24日～30日)報告書(第3稿、2008.2.28)」,
<http://www.jcdn.org/DLF2008/BritishCouncilUKreport.pdf>.
- NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN), 2010, (1)「コミュニティダンスのすすめ」.
- NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN), 2010, (2)「Dance Life Festival 2008 ダンスが日本を救う!?—日本におけるコミュニティダンスの確立に向けて—」報告書+映像DVD.
- 鯨岡峻, 2005,『エピソード記述入門:実践と質的研究のために』, 東京大学出版会.
- 鯨岡峻, 2012,『エピソード記述を読む』, 東京大学出版会.
- 古賀弥生, 2019,「『自信とうめぼれとドパミン』をダンスで:パーキンソン病患者を対象としたダンス活動(PDダンス)に関する実践報告」,『アートミーツケア』, 10, pp.91-100.
- 小西彩香, 有山瑛里奈, 伊藤涼, 中島悠, 藤本玲奈, 近藤義剛, 加藤洋, 藍野病院リハビリテーション部「パーキンソンダンスの持続効果の検証実施後の運動機能の変化に着目して」, 第51回日本理学療法学会大会(札幌), ポスターセッション, 2015年5月28日
- 砂原茂一, 1990,『リハビリテーション』, 岩波新書, 初版第14刷.
- 高畑進一, 宮口英樹編, 2013,『パーキンソン病はこうすれば変わる!』, 三輪書店, 第1版第2刷.
- 橋本弘子編著, 高畑進一, 宮口英樹, 中西一著, 2019,『続パーキンソン病はこうすれば変わる!』, 三輪書店.
- 長谷川幹, 2019,『リハビリ生きる力を引き出す』, 岩波新書.
- ブリティッシュ・カウンシル,「フォーラムレポート『高齢社会における文化芸術の可能性:日本と英国の実践から』前編」(2018年3月開催),
<https://www.britishcouncil.jp/programmes/arts/ageing-society/japan-study-tour/mar-2018>.
- Dance for PD Japan パーフェクトダンスfacebookページ,
<https://www.facebook.com/danceforpd.japan/>.